

日本語力育成系科目における Web 課題の自己評価に対するテキスト分析

加藤 利康¹⁾, たなか よしこ¹⁾, 河住 有希子¹⁾, 卯木 輝彦²⁾

1) 日本工業大学 共通教育学群

2) 株式会社フォトロン 研究開発センター

katoto@nit.ac.jp

Text Analysis on Self-Evaluation of Web Task in Japanese Language Education Subjects

Toshiyasu Kato¹⁾, Yoshiko Tanaka¹⁾, Yukiko Kawasumi¹⁾, Teruhiko Unoki²⁾

1) Dept. of Liberal Arts and Sciences, Nippon Institute of Technology

2) R&D Center, Photron Limited

概要

近年、高等教育において学習者が能動的に学習に取り組む学習法である「アクティブ・ラーニング」が求められている。この課題に対して日本工業大学の日本語力育成系科目では、教員が準備した環境における受身の学習から、学生が自分で自分の学びを設計し、能動的に学ぶことへの転換と捉える教育改善を行っている。本論文は、科目内で行っている検定試験の内容に準拠して作成した授業時間外 Web 課題の自己評価に対して、検定の合否者の学習法の違いを明らかにすることを目的としてテキスト分析を行った。その結果、合格者は友達と協力しつつ問題のヒントを意味、対義語との関連をもって学習しており、不合格者は自力でインターネット検索しながらヒントがただ問題を解く手がかりと考え、与えられた問題を見て解いている傾向にあることが明らかになった。

1 はじめに

近年、高等教育において学習者が能動的に学習に取り組む学習法である「アクティブ・ラーニング」が求められている。この課題に対して日本工業大学（以下、本学）の日本語力育成系科目では、教員が準備した環境における受身の学習から、学生が自分で自分の学びを設計し、能動的に学ぶことへの転換を目標とする教育改善を行っている[1]。この教育改善は自己調整学習を前提とするものである[2]。

能動的な学習を促すために、本学は大学生にとって身近な携帯端末を用いて、日常的に学ぶことのできる環境を用意している。授業時間外でも学生は学習することが可能になるため、学生がどのように学習しているかを教員が把握することは教育の観点から重要な問題である。

そこで、本論文は、日本語力育成系科目内で行っている「日本語検定 2 級」の内容に準拠して作成した授業時間外の Web 課題における自己評価に対して、検定の合否者の学習法の違いを明らかにすることを目的として合否別に対応分析と共に起ネットワーク分析を行った。

2 日本語力育成系科目の Web 課題

2.1 日本語力育成系科目

本学における日本語力育成系科目「文章能力トレーニング」は、アカデミックリテラシー形成を目的とした、1 年次春学期の 1 単位選択必修である。分析対象の 2015 年度の受講生は 548 名である。

授業は複数教員によるチーム・ティーチングで、学生の学びを見取りながら大教室での一斉授業や少人数クラス編成など、柔軟な枠組みで運営している。その中で共通して実施しているのが、「日本語検定 2 級」の内容に準拠して作成した Web 課題である。

2.2 Web 課題

全 14 回の授業に対して、宿題 13 回分の課題を用意した。内容は、敬語や対義語などの分類ごとに出題し、平均 60 問である。学習目標の一つに東京書籍の「日本語検定」2 級認定を挙げているため、日本語検定の出題分野に沿ってコンテンツを構成している。

課題に対する客観的な視点での振り返りと記録を継続するために毎回、各課題の最後に「課題に取り組むにあたって工夫したことは？」という

質問項目を設けた。

3 自己評価に対するテキスト分析

テキスト分析にあたり、検定受験者 534 名の内訳と「課題に取り組むにあたって工夫したことは？」欄の内容を表 1 に示す。1 人あたりの段落数は合否者それぞれ 4.2, 5.2 であり、文字数は 96, 90 である。記述量に大きな差はないといえる。

表 1 の文章を対象とした対応分析を図 1 に示す。また、共起ネットワークを図 2 と図 3 に示す。図 1 の o と x はそれぞれ合格者、不合格者を表す。

表 1 受験者の内訳

	合格者	不合格者
人数	38	496
段落数	160	2577
文字数	3630	44516

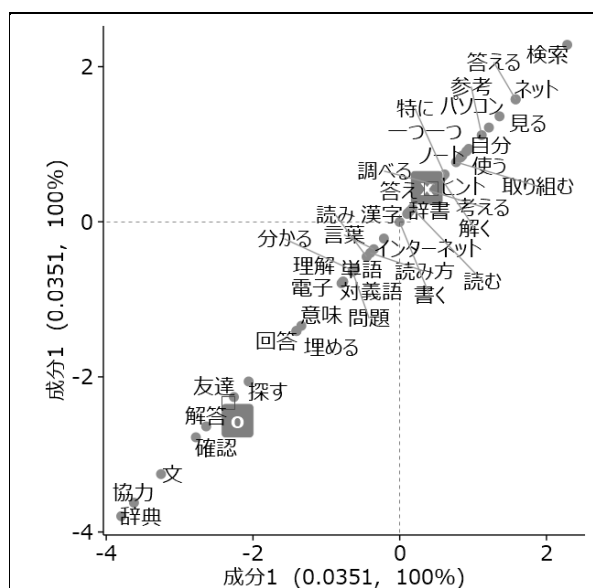


図 1 自己評価に対する対応分析

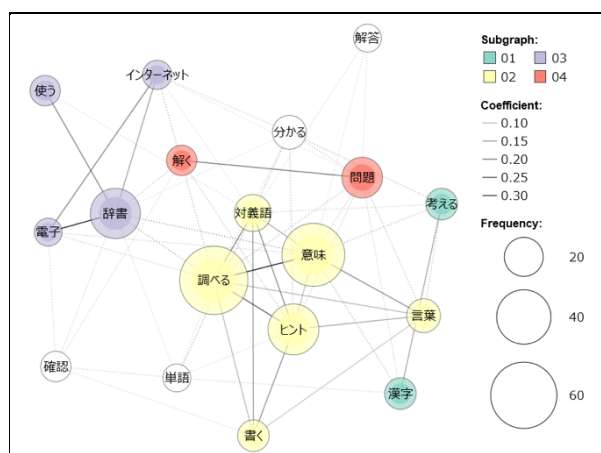


図 2 合格者の自己評価の共起ネットワーク

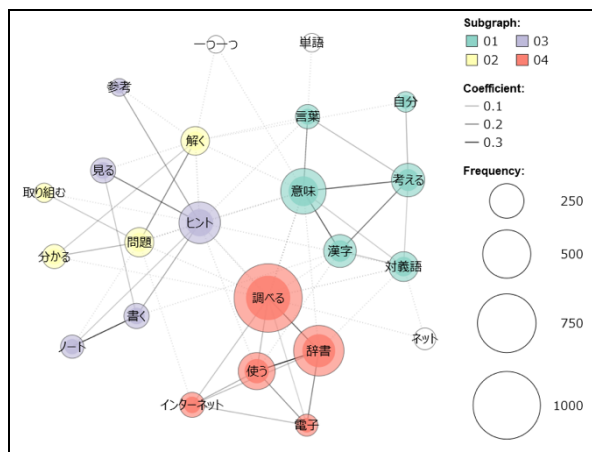


図 3 不合格者の自己評価の共起ネットワーク

図 1 から、合格者は辞典を用いて友達と協力しながら解答を確認している傾向にある。不合格者は自分一人でインターネットを用いて検索しつつ調べて答えている傾向にある。

図 2 から、合格者はヒントを意味、対義語との関連をもって見ている傾向にある。図 3 から、不合格者はヒントがただ問題を解く手がかりと考え、与えられた問題を見て解いている傾向にある。

以上から、合格者は問題に対して解答と同時に学習しており、不合格者は正解を見つけようとする作業になっていることが考えられる。Web 課題の出題はある一定の効果があると考えられるが、学習に対する姿勢作りが課題であると考えられる。

4 まとめ

本論文は、500 名を超える多人数授業科目において、授業時間外における検定対策の Web 課題を用いた自己評価に対するテキスト分析を行った。その結果、合格者は友達と協力しつつ問題のヒントを意味、対義語との関連をもってみており、不合格者は解答を探している傾向にあった。

一方で自己調整学習の観点からは、学習に対する姿勢づくりが課題である。今後は他の学生の学習法や到達状況を共有し合えるしくみを作ることによる効果を検討したい。

参考文献

- [1] 河住有希子、二宮祐、森塚千絵、加藤利康、たなかよしこ、自己調整学習を促す ICT 活用と双方向授業、論文誌 ICT 活用教育方法研究 Vol.18, No.1, pp.37-42, 2015.
- [2] B.J.ジーマーマン、D.H.シャंक編、自己調整学習ハンドブック、北大路書房、2014.